「大学生の資質･能力向上見られず　溝上慎一氏が教育改革の効果否定」

中央教育審議会答申などを受けて日本の大学に課せられた教育改革の成果について調査・研究を続けている溝上慎一桐蔭学園トランジションセンター所長・教授が 9 月 25 日、日本記者クラブで記者会見し、「この 10 年間の文部科学省施策の成果は上がっていない」という衝撃的な見解を明らかにした。

溝上慎一桐蔭学園トランジションセンター所長・教授（日本記者クラブで）

溝上氏は今年 8 月まで京都大学高等教育研究開発推進センター教授を務めていた。2007 年から 2016 年まで 3 年おきに 4 回、全国の大学生を対象に行った「大学生のキャリア意識調査」の結果を「大学生白書 2018―いまの大学教育では学生は変えられない」という著書にまとめ、8 月に刊行したばかり。2007 年から 2016 年という期間は、中央教育審議会答申や大学設置基準改正などを受けて文部科学省が大学教育の大幅な改善を求めた新しい施策を次々に打ち出した時期にあたる。

大学教育の改善では、単に知識を与えるだけでなく、主体的に考える力を身につけ、課題を解決する能力やそのために必要なコミュニケーション能力、プレゼンテーション能力などを育成することが求められた。「大学生のキャリア意識調査」は、溝上氏が企画・責任者となり、京都大学高等教育研究開発推進センターと公益財団法人電通育英会が実施した。

対象者は、全国さまざまな大学から抽出された大学生。調査が行われた各年で 1 年生と 3 年生、それぞれ男女合わせて 2,000 人前後を対象に、大学生活についてのさまざまな質問に答えてもらった。

文部科学省が打ち出した施策のうち、海外の大学でも重視されているアクティブラーニングという教育法がある。講義を受動的に聞くだけという古くからの学習法ではなく、「主体的・対話的で深い学び」を追求している。2007 年の最初の調査結果では、アクティブラーニングに「よく参加してきた」と「まあまあ参加してきた」を合わせた回答が 1 年生で 45.5%、3 年生で 51.5%。この数字は 2010 年、2013 年と調査の回を追うごとに高まり、4 回目の 2016 年調査では 1 年生が 58.0%、3 年生が 54.2%まで増えた。

一方、アクティブラーニングとともに能動的な学習行動として重視されるようになった「教室外での学習・自主学習」に向けた時間はどう変化したか？　予習・復習・宿題など授業に関係する教室外学習に振り向けられた時間は、2013 年に 1 年生は 1 週間で 4.91 時間、3 年生は 4.86 時間にとどまっている。さらにこの時間は 2016 年になると 1 年生 4.34 時間、3 年生 4.15 時間とさらに減った。

「授業に関係しない勉強を自主的に行う」ことに振り向けられた時間は、どうか？　1 年生は 2013 年が 1.70 時間で 2016 年には 1.76 時間とわずかに増えている。しかし、3 年生は 2013 年に 3.37 時間だったのが 2016 年には 2.88 時間に減ってしまっている。いずれにしろこの 10 年を通じ、大学生の多くは、授業に関係しない自主的な勉強もわずかしかしていない実態が明らかになった。

「日本の大学生は教室を離れた場では学習をしないし，できないという実態が見える」と溝上氏は指摘し、「この約 20 年間の大学の取り組みがほとんど機能していない結果」と断じている。

大学生自身の感じ方にもまた、溝上氏のこうした見方を裏付ける結果が得られた。23 項目の能力や事柄を列挙して「大学生活でそれぞれどの程度身についたか」を質問した結果だ。「かなり身についた」を 4 点、「全く身につかなかった」を 1 点として，自己採点させた結果は、「授業で身についたとする能力、事柄」のすべたの平均点が 3 点に届かない。大学生に特に求められている「問題解決能力」は、1 年生で 4 回の調査を通して平均 2.51～2.56 の範囲に納まってしまっている、3 年生も 2.55～2.68 とあまり変わらない。「プレゼンテーション能力」は、1 年生が 2.57～2.63、3 年生が 2.68～2.72。「リーダーシップ能力」は、1 年生 2.15～2.23、3 年生 2.13～2.27。いずれも似たようなものだ。

これら大学生自身の感じ方を総合的に判断した溝上氏の結論は、「大学生の資質・能力はこの 10 年、ほとんど変わらず、大学の授業で育てられていない。“身についた”と感じる学生もいるが、“身につかなかった”と感じる学生も多く、平均は中点程度（＝どちらともいえない）である」。2017 年に改定された初等中等教育の学習指導要領は、知識の理解の質を高め資質・能力を育む「主体的・対話的で深い学び」を掲げている。溝上氏は、「大学教育でこれだけしか育てられないと、高校までに基礎を育てることが勝負だ、ということになる」と指摘した。

では、高校以下の教育はどうあるべきか？　「高校の教師に言いたいことは何か」という記者会見で出た質問に対し、溝上氏は次のように答えた。

「大学で変わる生徒はいるかもしれないが、その確率は小さい。高校 2 年の秋から冬にかけての姿がそのまま大学でも続いてしまう。そう考えて指導に当たってほしい、と実際に高校の先生たちに話している。理解を示す高校もあるが、『そうはいっても大学受験が大事でしょう』と全く理解を示さない高校とに二極化しているのが現状だ」に振り向けられていないとさらに少ない。

小岩井忠道　JST 客観日本編集部

関連サイト

日本記者クラブ・会見リポート「溝上慎一・桐蔭学園トランジションセンター所長・教授」https://www.jnpc.or.jp/archive/conferences/35209/report